居住体験と住環境の理想像の類型

—地域差と志向性に関する基礎的考察—

THE LIVING EXPERIENCE AND THE IMAGE OF
THE IDEAL DWELLING ENVIRONMENT

周 静敏*, 服部 岑生**, 真境名 達哉*

Jingmin ZHOU, Mineki HATTORI and Tatsuya MAJIKINA

In contemporary city, although some traditional dwellings exist, most of the dwelling environments are created in modern way by urban designers and architects. However, are the residents satisfied with these? What living experiences have they gotten in their lives? Do they agree at that the new is better than the traditional? What are their ideal dwelling environment and what factors form that ideal image? We will search for these in this paper.

Keywords: proto-landscape, living environment, image of ideal environment, living experience

原風景、住環境、理想的環境イメージ、居住体験

1. はじめに

現代の都市の住環境は、歴史的な部分を残しているが、多くは近代的な集合住宅と都市計画の観点にたって形成されてきたものである。この住環境は、過去の伝統的な住環境と比較して果たして理想的なものであるかどうか。現代の人間は、どのように評価しているのか、理想的な住環境とはどのようなイメージのものであり、それらはどのような要因によって理想とされているのか。本研究は、これらの関心について、現代の都市居住者にヒヤリングを行い、この研究の第一段階として、概略的な知見を得ることを目的としている。

2. 住環境の理想についての既往の理論

環境や住宅の理想については、すでに類似の関心を基に先駆的な研究や検討がなされている。住環境に関する理想については、先ず扇田信参¹⁾が住宅の理想を「住に

関する不満や要求を生み出す潜在的な基盤となる意識が住意識である・・・住意識をもとにして・・・言葉や意見になり・・・住意見となる・・・さらに住意見が一つの体系だった意見として組み立てられ住宅に対するまとまったイメージを描きだそうとしている場合、それを住宅理想とよぶ。」と説明している。この考え方は、住宅に限っているが、住宅を含む環境に範囲を広げても常識的に考えて問題はない。「理想」が体系性をもっているとしている点に特徴がある。例えば、住環境についての単純な欲求や要求などは、意見であり、理想のレベルに達しないということになる。住宅計画の既往研究において、扇田信以降は理想が概念的に検討された経緯はない。

住環境の理想像に関係する研究として、原風景の研究がある。原風景の概念は、その初期の戦後の議論では、奥野健男²⁾のように「貧しさ、つらさや豊かでない生活面など」の消極的な側面から考えることが多かった。しかし、「原風景」には、肯定的・積極的な面、つまり

* 千葉大学自然科学研究科 博士課程・工修
** 千葉大学工学部建築学科 教授・工博

Graduate Student, Chiba Univ., M. Eng.
Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Chiba Univ.,
Dr. Eng.

豊かで、快適で、理想的な将来に対する憧れが内包されている。そのような観点の原風景論が、最近の延藤安弘などの議論に現れてきている。

70年代初期、小山田善次郎³⁾は、「都市景観を構成する諸要素に関して一般の人々がどのようなイメージを抱くかということを明らかにする」研究を行って、都市の生活環境を美しく快適に保つための諸問題を検討した。この論文はまだ原風景という言葉が使われていなかった。近年では、西村匡達⁴⁾は、「都市の心象風景の形成・想起要因に関する研究」を行い、さらに、「名古屋市の心象風景の場所性について」の研究を行った。そのほか、茂原朋子⁵⁾は、「原風景」を“自己形成期に体験したものの中で、現在においてもある感情の想起をとまって繰り返し思いおこされる風景あるいは情景”と定義し、「青年の“原風景”の特性と構造に関する研究」を行った。1987年に、延藤安弘⁶⁾は、大阪（千里ニュータウン）に住む九州出身者の住まいをめぐる原風景の調査によって「住志向に関わる原風景—ふるさとの思い出からみた住居の計画」の研究を行った。延藤安弘の原風景に対する解釈は、人々の“ここに深く刻みこまれた風景であって、その多くは、ふるさとにおける幼年の日々に経験した忘れがたい風物の、あるとき、あるところの思い出に属する、こころの風景のこと”としている。延藤安弘は、子供自身の環境への参与の違いによって、原風景の型を「自律的原風景」と「他律的原風景」の2つに分けている。このように、子供の環境への参与と受動的影響という軸で、原風景の型を区分することは、一つの切り口であるが、両者の中間に存在する型もあまりに多く、原風景の型の中軸にするにはあいまいさがあると考えられる。これらの研究のおおくは原風景を、風景という点に絞った一面的なアプローチから始めている。結局、今までの「原風景」の研究では、その「風景」に関する特性を主に論じたものが多かった。しかしながら、人間はある風景に視覚的に反応するとき、その風景の自然的な面を評価するだけではなく、その周辺の環境や生活空間に対する認識などを含めて考えないだろうか。本研究は、これまでの「原風景」の概念から「原環境」（風景だけでなく、環境或いは空間を含むもの）という概念に広げ、「原風景」を含む環境—「原環境」を明らかにすることとした。

原風景に関する論議で、岩田慶治⁸⁾は原風景には、「「原」という言葉がドイツ語urにあたるのかそれともprotoにあたるか、解釈がわかれる」として、唯一の本源の風景と複数ある類型としての風景の二つの意味があることを指摘した。これは、風景の理想として原風景を単純に意味づける考え方に問題があることを示唆している。しかし、本源の風景というものがあるとすると、例えば日本人にとっての本源の風景というようなものであるが、関根康正⁷⁾が示すように時代の変化による原風景の相対的な変化が報告されており、原風景は体験

の多様性とともにより変質し複数のproto-風景型になっていっているのではないだろうか。本研究では住環境についての体験と理想を明らかにすることを目的としているが、本源のなものを見いだそうとするのか、その類型を明らかにするかは、同様に問題となるが、proto-環境という意味で、典型的な住環境像を明らかにしたいと考えた。

延藤安弘は、個人の原風景のあり方からその人の住志向—住に関する理想あるいは理想に類する意識—を見いだそうとしている。延藤安弘は、原風景を個人の体験に根ざした感動のある風景の記憶としており、その調査から住宅計画の手がかりを見いだすことで、従来にない理想的な住宅計画が可能であると考えている。原風景が個人の理想性を内在するという考え方は、原風景に関する、本研究と深く関わる意味を明らかにしている。原風景を調査する際に、感動の体験を基礎にすることが、調査された原風景に理想性を内在させることになると推理できる。同様の考え方に立つならば、本研究でも、住環境計画における有効性を確保するためには、単なる体験としての住環境ではなくて、理想としての体験を問うことが重要になる。

原風景から環境へ視点を移していくと、「ふるさと」の概念との関連に気づく。日本ではふるさとの研究は、特に住環境の研究分野では、延藤安弘や茂原朋子らの原風景の研究の中で語られており、すでに見た問題以外の提起はみられない。外国ではF.L.レンツローマイス⁹⁾の体系的な考察による文献がある。この中で、H.トライネンのふるさとの定義「場所への象徴的な愛着」が紹介されており、その愛着が空間的なものというより人間的な交流の記憶によることが強調されている。この考え方は、多くの社会学者の支持を得ているという。しかしながら、今回の研究では、住環境の理想を人間の交流を含む観点までは広げない。

3. 研究方法

調査方法としては、サンプル写真（図・1a,b）によるイメージの呈示と配置やデザインなどの簡単な説明（表1,2）により、街頭インタビューを行った。

表-1 居住体験の種類注1)

タイプ	特徴	住棟の形	配置	材料・デザイン	環境	
					緑の量	立地
自然系	山村	戸建	分散	藁葺きと木造	多い	山間部
	海村	戸建	分散	木造	多い	海辺
	川村	戸建	沿道	木造	普通	川沿
	街村	戸建	沿道	木造	少ない	街道沿
	農村「旧」	戸建	沿道	藁葺きと木造	多い	農村部
村落系	農村「新」	戸建	沿道	木造	普通	農村部
	下町の長屋	2層連続	沿道	木造	少ない	下町
	戸建て住宅	戸建	沿道	木造	少ない	郊外
	団地住宅	中層板状	平行	コンクリート	少ない	郊外
都市系	マンション	中層板状	複合	コンクリート	少ない	市街地

図・1a 居住体験の写真サンプル

図・1b 理想像の写真サンプル

居住体験については、表-1のように、自然系、村落系、都市系の三つの環境を前提に、古さの順でよく見られる住環境を選んだ。具体的には、10種類で、「山村」、「海村」、「川村」を自然系のグループとし、「街村」、「農村(旧)」、「農村(新)」を村落系のグループとし、「下町の長屋」、「戸建て住宅」、「団地住宅」、「マンション」を都市系のグループとした。

近年では、都市と郊外にいろいろな新しい住環境ができ、タイプとしても豊かである。そこで、理想像(表-2)については、建物の階層、デザインの特徴等の条件によって、9種類に分け、「平行低層住棟」、「囲み低層住棟」、「戸建て住宅」の3つを低層系のグループ、「中層住棟」、「地上パーキング式中層住棟」の2つを中層系のグループ、「都市高層住棟」、「郊外高層住棟」の2つを高層系のグルー

表-2 理想像の種類注2)

タイプ	特徴	住棟の形	配置	デザイン	環境	
					緑の量	立地
高層系	都心高層住棟	高層塔状	分散	-	少ない	市街地
	郊外高層住棟	高層塔状	分散	-	多い	郊外
低層系	平行低層住棟	低層板状	平行	-	多い	郊外
	囲み低層住棟	2層連続	口の字	-	多い	郊外
	戸建て住宅	戸建	沿道	-	多い	郊外
中層系	中層住棟	中層板状	平行	-	普通	郊外
	地上パーキング式中層住棟	中層板状	平行	-	少ない	郊外
新デザイン系	中庭式新デザイン住棟	中層板状	中庭	新	多い	郊外
	ストリート式新デザイン住棟	中層板状	沿道	新	普通	郊外

プ、「中庭式新デザイン住棟」、「ストリート式新デザイン住棟」を新デザイン系のグループとした。

調査地域としては、ニュータウンである多摩(多摩センター駅前)、郊外都市の千葉(パルコ前広場)、田舎の伝統的な古い町である静岡県松崎町(銀座通り)を選定した。そして、一般的な通行人を対象として選び、男女及び老若の割合、有無職者の割合などについては、1対1、合計100人ずつを目途に調査した(表-3)。

表-3 地域別調査人数注3)

調査対象	一般の通行人 (人)		
	千葉	多摩	松崎
調査地域			
男女比 [男/女]	48/52	46/64	18/52
老若比 [老/若]	55/45	58/62	32/38
職業の有無	62/38	35/75	30/40
居住者/非居住者	69/31	73/37	70/0
調査人数	100	110	70
合計	280		

表-4 調査者用の調査シート

懐かしい環境と住まいの調査										
■住まい・通り・庭の雰囲気の体験についての質問										
1. 体験のあるものを○、体験のないものを×、どちらとも言えない△ (近い体験は○)										
写真記号	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
体験のある・ない										
2. 長い体験のあるものを○										
3. 子供の頃、一番長く住んだ場所										
(1) 住宅がまばらに建つ郊外 (2) 住宅がまばらに建つ農山村部										
(3) 市街地の建て込んだ場所 (4) 自然が多く人家のほとんどない場所 (5) その他										
4. 子供の頃、一番長く住んだ住まい										
(1) 一戸建て (2) 集合住宅 (3) 木質アパート (4) その他										
■住みたい住まいと環境についての質問										
5. 住みたいものを○、住みたくないものを×、どちらとも言えない△										
写真記号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	
住みたいかどうか										
6. 住みたい、住みたくないの中で○、××を教えて下さい										
7. 現在住んでいる場所										
(1) 住宅がまばらに建つ郊外 (2) 住宅がまばらに建つ農山村部										
(3) 市街地の建て込んだ場所 (4) 自然が多く人家のほとんどない場所 (5) その他										
8. 現在の住まい										
(1) 一戸建て (2) 集合住宅 (3) 木質アパート (4) その他										
■人口属性についての質問										
年齢 [] 年代 性別 [男・女] 居住者 [はい・いいえ] 有職者 [はい・いいえ]										

調査の内容は、居住体験や理想像のSD法による評価と人口属性などについてインタビューした。居住体験は○、○、△、×の4段階評価とした。質問1、2(表-4参照)について、まず質問1で、○(有り)と×(なし)を付けてもらい(付けない場合△)、質問2で、さらに長い体験のあるものを◎として回答させた。理想像は、◎、○、△、×、××の5段階評価とし、例えば、まず質問5と6について、質問5で、○(理想的)と×(理想的でない)を付けてもらい(付けない場合△)、質問6で、さらに、もっと好むもの、より嫌いのものをそれぞれ◎と××として回答させた(表-4)。

4. 基礎的な結果

(1) 調査対象別の居住体験の特性

調査地域別に回答(表-4質問1,2の合成)の各項目の平均値を算出し、イメージプロフィール注4)を得た。居住体験について、「体験したことがない」から「長く体験した」

図-2 居住体験のイメージプロフィール

の平均値をY軸に取り、平均の大きいものから順にX軸に左から右の順にプロットした(図-2)。

全体(千葉と多摩、以下同様)と千葉及び多摩の傾向は、ほぼ同じである。多摩は「団地住宅」と「戸建て住宅」で、一部傾向が異なっている。

松崎の傾向は、全体の平均と大きく異なっている。農村(旧)の体験が長く、団地や戸建て住宅の体験が短く出ている。

(2) 調査対象別の理想像の特性

理想像(質問5,6)注5)について「住みたい」イメージの評価の平均値をY軸に取り、平均順にX軸の左から右の順にプロットした(図-3)。

図-3 理想像のイメージプロフィール

全体と千葉と多摩の傾向は、ほぼ同じであった。

細かく見ると、千葉と多摩は「中庭式新デザイン住棟」と「郊外高層住棟」に対しての評価は全く同じだが、評価の平均値が中くらいの「囲み低層住棟」などでは、多摩は千葉より理想的という結果が出た。

松崎の結果を見ると、平均値がやや高く、「囲み低層住棟」と「平行低層住棟」が割りと好まれ、千葉と多摩で人気がある「中庭式新デザイン住棟」はあまり気に入られなかった。

5. 居住体験と理想像の類型(表-5,表-6)

ヒヤリングの回答(表-4の項目1と5)をデータに、ウォード法(minimum variance)のクラスター分析によって、全体、千葉、多摩、松崎毎に、居住体験と理想像のそれぞれに複数のタイプからなるグループを得た。各グループ毎のイメージプロフィールを比べ、平均得点の低いグループ(理想的あるいは体験が長い)から順に配列し、命名した。

以下表-5、6の説明について、「理想的」あるいは「長体験」から「非理想的」あるいは「無体験」までの平均得点を記号化し、1.00-2.00の範囲を◎の記号で「非常に高い」を示

し、以下同様に、2.01-2.99→○やや高い、3.00→△どちらともいえない、3.01-3.99→×やや低い、4.00-5.00→××非常に低いを示した。

(1)居住体験のクラスター分析(表-5)

表-5 居住体験のクラスター分析の結果

(A,B,Cの下の数値は、体験の程度の平均得点)

全体については、主に[A](○)、[B](○)、及び必ずしも体験が長くない[C](×)の3つのグループが得られた。[A]は、マンション、下町の長屋、団地住宅、戸建て住宅などの体験で、現代的な都市によく見られる環境である。[B]は、多様な伝統的古い村落で、[C]は、山の周辺の街村の環境である。

千葉については、[A1]、[B1]、[C1]が得られ、各グループの構成は全体の結果と同じく、平均得点もほぼ同様であった。

多摩については、[A2](○)、[B2](○)、[C2](○)の3つのグループが得られ、いずれのグループも体験が長い。特に体験の長い[A2]は、自然が多い山や海などの周辺の村落と団地住宅である点に特徴がある。[B2]は、全体の[A]と近いが、「下町の長屋」と「団地」に替わり、より古い「街村」と「農村」が選ばれて、やや伝統的な都市あるいは都市と郊外の境界の周辺での体験傾向が現われている。[C2]は、郊外の川村と都市の下町の長屋で構成されている。

松崎については、[A3](○)、[B3](○)、[C3](○)の3つのグループが得られた。[A3]は、松崎町のような山の周辺環境により構成され、比較的長く体験したことを示している。[B3]は、様々な古い伝統的な街村により構成され、[C3]の構成は、全体の[A]と似ているが、「下町の長屋」が「海村」に替わり、松崎の地理環境の特徴を反映していると考えられる。

千葉、多摩、松崎に共通の体験の長さを比べると、都市系の居住体験の順位は千葉→多摩→松崎であり、村落系の体験順位は、松崎→千葉→多摩であった。自然系の体験は多摩が千葉より長かった。

この結果をみると、千葉は、都市の居住体験の長い人が多く、農漁村部の居住体験が全体として少なくなっており、都市の居住体験がある流入人口が多い地域であることを示している。その一方、多摩ニュータウンは、同様に流入人口で構成されるが、比較的新しい人口であることから、その居住体験は割と豊かで、農村部の居住体験のある人も多く見られる。松崎は、山や海で囲まれている伝統的な町で、故郷から離れたことがない人が多数であるため、伝統的な町しか体験していない人が多いと考えられる。

(2)理想像のクラスター分析(表-6)

表-6 理想像のクラスター分析の結果

(a,b,cの下の数値は、理想の程度の平均得点)

全体については、[a](○)、[b](×)、[c](×)、[d](×)の4つのグループが得られ、平均値が3より低い理想的なイメージは[a]のみであった。[a]は、建物のデザインが新しいものにより構成され、[b]は、緑が多い低層住宅により構成され、[c]は、中層住棟により構成されている。[d]は、高層住棟の特徴を持っていると見られている。

千葉については、[a1](○)、[b1](×)、[c1](×)、[d1](×)の4つのグループが得られた。[a1]は、[a]と近く理想的な唯一のグループである。[b1]は、[c]の特徴に近いが、「ストリート式新デザイン住棟」が入っている。[c1]と[d1]については、全体の[b]と[d]の特徴とほとんど同様であった。

多摩については、[a2](○)、[b2](○)、[c2](×)、[d2](×)の4つのグループが得られ、全体と一致している。しかし、[b2]は理想的なグループとなり、他の地域と異なり、囲み型や低層の集合住宅が肯定的に見られていることに特徴がある。

松崎については、[a3](×)、[b3](×)と[c3](××)が得られ、[a3]は、全体の[b]のように低層住棟で構成されているが、最も理想的となっていない。[b3]は千葉の[b1]と同じく、新しいデザインの特徴がやや注目されている。[c3]は、高層住棟について、他地域の高層系と一致しており、「中庭式新デザイン住棟」も入っている。

以上の結果をみると、千葉と多摩は、建物のデザイン性や高層住棟に対する認識がかなり一致しているが、低層住棟と中層住棟に対する評価は逆になった。これは、多摩ニュータウンにおける新しいデザインや中庭式の住宅が評価されているのではないだろうか。ここには、多摩の回答者の体験と評価が出ており、他地区の回答者は一般的なイメージでしか判断できなかったといえるかもしれない。しかし、全体の中で、新しいデザインのグループは、一番上位に入っており、多摩のみならず、他の地区からも少なからず支持が出ていると予想される。

松崎の新しい住環境に対する反応はかなり消極的、特にデザインを理想とする意識は見られなかった。これは、千葉と多摩は近代的で、人々は単に住むことを求めるだけでなく、より一層個性がある美しいデザインの住環境を追求しているわけである。松崎は田舎の伝統的な町で、伝統的、自然的な環境のまま育ってきた人々が多く、故郷に対する愛着が根強く、反近代的な傾向が強いということがその消極的な反応の原因の一つと思われる。

(3)居住体験と理想像の両者の関連 (表7,表8)

居住体験と理想像の両者の関連を探るため、各々の調査時に設定した種類への回答に基づき、回答者をそれぞれ以下に説明する8タイプ、16タイプに分類した。このタイプは、クラスター分析のグループが、イメージのグループとすると、同一体験、同一理想を持つ回答者のタイプである注6)。居住体験と理想像の類型について、独立性の検定を行ったところ、差異が認められたので、それぞれの関係について分析を行った注7)。

表7 居住体験に関する回答者のタイプ注7)

タイプ	I	III	V	VII	II	IV	VI	VIII
特	自然	非自然	自然	非自然	自然	非自然	自然	非自然
	村落		非村落		村落		非村落	
徴	都市				非都市			

居住体験について、主に[I][II][IV]の3タイプの回答となった。この3タイプの各特徴は、以下である。

[I](47.6%)—[自然系・村落系・都市系]→全ての体験のある者

[II](28.6%)—[自然系・村落系・非都市系]→都市体験ない者

[IV](16.2%)—[非自然系・村落系・非都市系]→村落のみ体験のある者

以上の3タイプは、共に村落系を体験している。さらに都市系対非都市系の体験比率はほぼ1:1であった。これからみると、日本の都市の居住者は農村の体験が共通していると考えられる。これは、日本の都市化が農村から発展し、自然を少なくして、人口や建物の密度を序々に高め、近代化を進めて行くシステムであり、農上都市化注8)といわれるわけである。

そして、3タイプの内、[I]と[II]の自然系が81.1%を占めるのは、村落が多く見られる中の都市化の時期の居住体験の状況を映したと思われる。例えば、千葉は、農上都市化によりできた都市で、現在、自然が少なくなった。従って、この現象は、都市化に伴うもので、若者は自然体験が少ないかもしれないが年寄りには体験があるはずだと思われる。多摩は千葉と違い、人工的に造られた特別のニュータウンであるから、自然が都会地より計画的に残されている。

理想像について、以下の7つが主な回答のタイプとして見出され、全体の80.6%を占めた(先頭番号は表8に内容を示した)。

[15](22.4%)—[非新デザイン系・低層・非高層・非中層]→低層のみが好きな者

[16](16.2%)—[非新デザイン系・非低層・非高層・非中層]→どれも好まない者

[7](14.3%)—[新デザイン系・低層・非高層・非中層]→新しいデザインと低層を好む者

[5](8.6%)—[新デザイン系・低層・非高層・中層]→高層のみを嫌う者

[13](6.7%)—[非新デザイン系・低層・非高層・中層]→低層と中層を好み、高層と新しいデザインを嫌う者

[8](6.2%)—[新デザイン系・非低層・非高層・非中層]→新しいデザインのみを好む者

[1](6.2%)—[新デザイン系・低層・高層・中層]→全てを好む者

7つタイプの特徴をまとめると、非高層系対高層系の割合は92.8%:7.2%、低層系対非低層系のは72.2%:27.8%、非中層系対中層系のは73.3%:26.7%、非新デザイン系対新デザイン系のは56.2%:43.8%であるという結果が得られた。ここから、高層好きな者は、極めて少なく、低層や中層系を好む者は、かなり多く、新デザイン系を好む者はかなりいるが、非新デザイン系の傾向に比べればやや弱いと見られる。

こうして、現代の人々は、新デザイン系についての見方が違う人があるが、住棟の高さに対する関心がより高

表8 理想像に関する回答者のタイプ注7)

タイプ	1	5	2	6	3	7	4	8	9	13	10	14	11	15	12	16
特徴	高層	非高層	高層	非高層	高層	非高層	高層	非高層	高層	非高層	高層	非高層	高層	非高層	高層	非高層
	低層		非低層		低層		非低層		低層		非低層		低層		非低層	
	中層				非中層				中層				非中層			
	新デザイン								非新デザイン							

く、高層嫌いで、低中層好きという意見でかなり一致している。

次に、居住体験と理想像の関連分析を行う(表9)。

タイプ[15]と[7]は、いずれも低層が好きだが、新デザイン系に対して態度が異なっている。タイプ[15]は、[I]の体験者が最も多く、ついで、[IV]の村落のみ体験ある者が含まれている。つまり、都市、村落、自然のすべてに体験のある者は、低層住棟を好み、新デザイン系に対する関心は、ややうすいと考えられる。一方、低層も新デザイン系も好きなタイプ[7]は、[II]のように村落と自然体験があり、都市体験のない者が多かった。

この結果から考えると、都市体験のある者は何よりも低層住棟を期待している。これに対して、都市体験のない者は、落ち着くような低層の住居を好んでいると共に、より個性的で新しいデザインの住宅も望んでいることが分かる。

[5]は、新デザイン系を好み、[13]は、新デザイン系を嫌うが、いずれも低層と中層を好み、高層を嫌うタイプであった。[5]の支持者は[I]のようなすべての体験のある者であり、[13]の支持者は、[II]のように村落や自然系を体験していない者が多い。

ここに、すべての体験のある者においては、「低層しか好まない者が新デザイン系を嫌い」、「低層だけではなく中層も好きな者が新デザイン系に好感も持っている」ことが分かる。

そして、[8]は、新デザイン系のみ好きなタイプであり、[16]は、どれも好きではないタイプであった。居住体験タイプについて、両方とも、[I][II][IV]の順に多いが、理想と体験との間には特別な関係が考えられない。

最後に、すべてを好きなタイプ[1]の結果を述べる。[1]は、7つのタイプの内、唯一の高層系を好むであった。このタイプを選んだ人は、幾分[IV]の村落系のみの者に多い。これから、体験が村落系に限られると住宅の高さや形式について、強い好奇心が出ると推理されるが、必ずしも明確ではない。

(4)理想像の要因

◇最も長い居住体験

長い居住体験のある環境の上位3つは、「団地住宅」「戸建て住宅」「農村(新)」である。これらの体験を持つほとんどの人は、低層に最も憧れ、新デザイン系と中層系に好感を持つという点がほぼ同様であった。「農村(新)」を長く

表-9 理想像と居住体験注9)

理想像 %	居住体験タイプ			長い居住体験		
	I	II	IV	団地住宅	戸建て住宅	農村(新)
高層系	5	4	9	6	5	0
新デザイン系	30	33	30	27	30	31
低層系	51	46	39	45	47	47
中層系	15	18	23	23	18	22
合計(人)	111	80	44	89	78	32

体験する人は、他と比べ高層系をより嫌うという現象が見られた(表-9右)。しかし、「農村(新)」しか体験していない人(IV)は、高層系好きの傾向がより強かった(表-9左)。

◇幼年期の住環境と現在の居住環境

幼年期に、「市街地」と「農村」の両方を体験した人を比べると、「市街地」は低層系、「農村」の方が中高層系を理想とする傾向が見られた(表-10左)。

幼年期の住まいは、ほとんどの人は「一戸建て」であるが(資料省略)、現在の住まいは、「一戸建て」と「集合住宅」となり、住まいが変化しつつあることを示している。現在一戸建てに住む人は低層を好み、集合住宅に住む人の方が中層系を好んでいる(表-10右)。

表-10 理想像と幼年期の住環境・現住まい注9)

理想像 %	幼年期の住環境		現住まい	
	市街地	農村	一戸建て	集合住宅
高層系	4	7	5	6
新デザイン系	32	29	28	31
低層系	49	44	53	41
中層系	16	20	15	22
合計(人)	101	134	102	118

◇年齢・性別・居住者・職業の有無など

若者と年寄りを比べると、低層系を好む傾向は年寄りの方がやや強いが、中層系については、若者は年寄りに比べ、志向が強いことが分かった(表-11a)。

女性と男性を比べると、低層系を理想とする人は男性に多いが、中層系は女性の方がより多い(表-11b)。

居住者と非居住者を比べると、居住者の回答人数はかなり多い。中高層系や新デザイン系について、両者の割合の差異があまり見られないが、非居住者のほうが低層系の志向がやや高いことが分かった(表-11c)。

無職者と有職者を比べると、有職者は低層系の志向がやや高く、中高層系や新デザイン系については両者の認識がほぼ同じである(表-11d)。

表-11 理想像と年齢・性別・居住者・職業の有無注9)

理想像 %	年齢		性別		居住者		職業	
	若者	年寄り	男	女	肯定	否定	有	無
高層系	6	4	4	6	6	4	4	6
新デザイン系	30	29	28	30	30	28	30	29
低層系	42	57	53	45	47	51	51	47
中層系	23	11	15	19	18	17	16	19
合計(人)	146	108	104	150	32	13	15	30
区分	a		b		c		d	

6.まとめー「原環境」像の存在に関する考察

環境の原型(proto-environment)の存在について、住宅の特徴によって人々に異なった反応があり、住棟形態

別の原型という手がかりが得られた。しかし、これまでの原風景論における風景に共感するという精神的意味については、住宅の物理的特徴のみの調査方法では、明らかにすることが出来なかった。

この研究は、古い住環境、低、中、高層住棟という常識的な差異を明らかにしただけなので、取り立てて独創的ではないと考えられる。しかし、まず居住体験では、農山村や、近代化後の農山村、および都市住宅の3グループに及び、はっきりと住宅形式の近代化が裏付けられると共に、過半が都市住宅体験者となっている。しかも、環境の理想像では、極端に低層系住宅が好まれ逆に高層住棟が嫌われている点が、明らかにされている。この点からは、低層系環境こそが「ur-environment」であるといっても言い過ぎでないと考ええる。このように、予想されたことではあるが、志向の主な方向が明らかにされたことが新しい点ではないかと考えられる。また、都市住宅の居住体験と低層系の理想像という関連、都市体験のない人々の高層系の理想像という、いわば、逆転した関係も意味ある結論であった。

今後は、風景や環境への共感などの傾向や、より詳細な住宅形式の理想論、また地域差、人口特性差などについての課題が考えられる。

注：

- 1) 「沿道」とは、住棟を道路の両辺に配置する方式。
- 2) 「複合」は、住棟の配置は単一でなく、二つ以上の方式を合成し、出来たものという。農村「旧」とは、古い日本の伝統的な農村をいう。
- 3) 老/若とは、40代以上の人と40代以下の人の比率をいう。居住者/非居住者とは、調査対象地域の居住者と非居住者の比率をいう。
- 4) ◎→1,○→2,△→3,×→4と数値化した。
- 5) ◎→1,○→2,△→3,×→4,××→5と数値化した。
- 6) 体験と理想の関係を見るためには、回答者の分類が必要である。クラスター分析のグループはイメージの分類であるので適さない。新しい回答のタイプは、呈示した環境の特徴の組み合わせから、タイプが含むイメージへの回答が少くとも◎と○をひとつ含む回答者から、その他の回答者を区別してタイプ化した。例えば、村落系のタイプのどれか

ひとつのタイプに、◎か○の回答があれば村落系回答者とし、他を非村落系とした。

7) カイ自乗検定の事前処理として、居住体験と理想像の類型事例数の少ないタイプをまとめ（有効回答のみ）、居住体験は、A、B、C及びDの4タイプ、理想像は、a、b、c及びdの4タイプとした（下の表に示す）。(4-1)(4-1)=9で、9次元のカイ自乗検定を行い、危険率5%で有意差があると判定された。

居住体験と理想像のタイプの分類表

居住体験 \ 理想像	A (I)	B (II)	C (IV)	D (その他)	合計 (人) (8タイプ)
a(1,2,3,4,6,9,10,11,12,14)	25	11	15	3	54
b(13,15)	30	16	8	7	61
c(5,7,8)	28	23	6	4	61
d(16)	17	10	5	2	34
合計 (16タイプ)	132	60	34	16	210

8) 農村から、近代化が序々に進み、大都市に变身する都市化システムである。

9) 簡略化のため、比率の小数点以下は四捨五入して、示していない。又、比率の差の検定によって、4%迄は、危険率5%で差があるという結果となった。そこで、有意差のある項目のみ網掛けをした。

参考文献：

- 1) 扇田信：住居観の研究—住意識について—,日本建築学会論文報告集第68号,pp178-183,1961
- 2) 奥野健男：文学における原風景,集英社, pp39-56,1972
- 3) 小山田善次郎：都市景観のイメージ調査—(I)鹿児島市の場合—,日本建築学会論文報告集第212号,pp59-65,1973
- 4) 西村匡達[他2名]：都市の心象風景の形成・想起要因に関する研究,第27回日本都市計画学会学術研究論文集, pp721-726,1992 / 名古屋市の心象風景の場所性について—都市の心象風景に関する研究・その1—,名古屋市中心市街地の心象風景の情緒的意味と方向性について—都市の心象風景に関する研究・その2—,日本建築学会学術講演梗概集(東北), pp155-158,1991
- 5) 茂原朋子[他2名]：青年の“原風景”の特性と構造に関する研究,第26回日本都市計画学会学術研究論文集, pp457-462,1991
- 6) 延藤安弘：住志向に関わる原風景—ふるさと—の思い出からみた住居の計画,1987・住生活研究会,ライスタイルからみた住居・環境計画に関する調査研究,1987
- 7) 関根康正：原風景試論,季刊人類学13巻1号, pp164-193,1982
- 8) 岩田慶治の原風景論：参7月号, pp191
- 9) F・レンツ・ローマイス：都市は“ふるさと”か,鹿島出版社, pp46-70,1978

(1995年3月10日原稿受理, 1995年8月2日採用決定)